

ベンチャー企業を対象にした投資基金（ファンド）の投資手法が変わりつつある。インターネット分野を中心に一社当たりの投資額が大きく膨らみ、従来の分散型投資から集中型が主流になってきた。投資決定までのスピードも加速し、わずか半年でファンド全体の資金をほとんど使い切るケースも出ている。有望と思ふネット関連企業を早めに囲い込むことの狙いが背景にあるが、リスクも同時に高まることから従来以上に投資対象の選別が重要になっている。

「昨年十二月に二十億円のファンドを設立したばかりだが、十五億円強の投資

ベンチャーファンド 集中型投資 主流に

ス（東京・港）の関真壽社長は早くも二本目のファンド設立に動いている。

NTVPは3本目

独立系の日本テクノロジーベンチャーパートナーズ投資事業組合（NTVP、東京・文京、村口和孝代表）は昨年十一月に組成した十

四億円のファンドの投資を

ほぼ終え、今月に入り三本目の十億円強のファンドを組成した。新興VCのアイ

シーピー（東京・港、稲田

凱輝社長）も昨年十一月に

設定した総額三十五億円の

ファンドの投資がほぼ完了

し、二本目のファンド組成

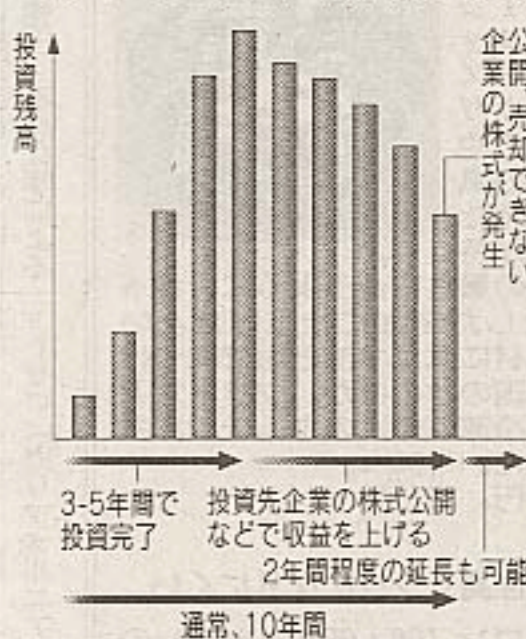
から増資で投資資金を調達す

る。従来のベンチャーファンドは三〜五年間程度かけて徐々に投資していく手法が主流だった。伝統的な銀行系VCなどは株式公開が近い中堅企業に一件当たり数千円程度の資金を分散投資してきた。ある程度公開利益を得られると分かっ

た時点で、銀行からの紹介案件に小口の投資をするのが典型的な手法だった。最近では米国と同様、ネットビジネスの台頭がベンチャー投資に変革をもたらしている。情報技術（IT）分野を中心とするベンチャーへの投資金額は一社当たり数億円程度に膨らんでいる。投資する段階も会社設立後間もない初期が多い。

ネット企業囲い込み狙う

ベンチャーファンドの一般的な投資手法



た時点で、銀行からの紹介案件に小口の投資をするのが典型的な手法だった。最近では米国と同様、ネットビジネスの台頭がベンチャー投資に変革をもたらしている。情報技術（IT）分野を中心とするベンチャーへの投資金額は一社当たりの数億円程度に膨らんでいる。投資する段階も会社設立後間もない初期が多い。

VC側の早期囲い込みの狙いとともに、株式市場でのネットバブルがベンチャーの株価をつり上げている側面もある。

NTVPは三月、ネット関連のシノックス（東京・千代田、篠田亘司社長）に単独で三億五百万円を出資した。独立系VCのワイルドビューテクノロジーベンチャーキャピタル（東京・新宿、田中邁社長）もベンチャー支援のイー・ベンチャーサポート（東京・文京、池上哲二社長）に四〜五月で合計二億円強を投資する。

ハイリスクの側面も

多額の資金を投入するだけに取引先紹介や財務、事業戦略面の指南にとどまらず、社外取締役を派遣するなど事業が失敗しないよう

秘めている。

だが、投資段階で有望に見えても初期のベンチャービジネスにはリスクがつきまとう。新興VCの集中型投資戦略はハイリターンとともにハイリスクの側面も秘めている。

積極的に経営に関与する。従来の「おつき合い型投資」とは異なる「育成型投資」ともいえ、財務面などに弱みを持ちがちなベンチャーにとっては事業を成功させる可能性が高まる。